

東大日本史 2024年第4問 平井答案

第1問

設問 A

太上天皇は天皇と同等以上の権力を奮い国政に関与したが、9世紀前半以降は直接政治に関与しない存在となった。

設問 B

奈良時代までは、畿内の有力氏族が上級官人に就き、天皇に奉仕する関係が継続して採用された。9世紀前半以降は唐風化政策の推進で貴族社会が一新され官僚制が充実し、学問や文学に秀でた人物が天皇の個人的な信任により上級官人に登用されるようになった。

奈良時代までは、畿内の有力氏族が上級官人に就き、天皇に奉仕する関係が継続して採用された。9世紀前半以降は唐風化政策の下で従来の貴族社会が刷新され、学問や文学に秀でた人物が天皇の個人的な信任により上級官人に登用されるようになった。

第2問

設問 A

日宋貿易を通じて来日していた技術を持つ商人や僧などを登用して頼ったため、大仏の鑄造や伽藍の造営には宋の技術が使われた。

設問 B

源平合戦中には奥州藤原氏に対抗し朝廷の支持を得ようとして金品を送って協力した。奥州合戦後には封建的主従関係を結んだ地頭や有力御家人に対し奉公として再建を命じることで協力した。

第3問

設問 A

ポルトガルと貿易しつつも日本人の海外往来を制限してキリスト教を警戒していたが、島原の乱で一層脅威に感じたため、オランダから生糸を確保できる目途を立てた後、ポルトガル船来航を禁じた。

設問 B

来航を禁じたポルトガル船が再来して布教や軍事衝突が起きる可能性があることを大名たちに知らせて、沿岸防備を強化させるため。

第4問

設問 A

地租改正により土地を担保にした借金が容易になった上に、松方デフレによる実質的な税負担増が重なり、土地を手放す自作農が急増した。以後も増税などで経営不振に陥る自作農の転落が続いた。

地租改正により土地を担保に借金する自作農が増えたが、デフレや増税などで困窮して転落し小作農が増加し続けた。大正期に重工業化が進むと農村部の小作農が都市へ流出して小作地率が停滞した。

設問 B

戦争の長期化に伴い農民の出征による労働者不足や肥料不足で米の生産力が低下していた。戦争の継続のために、米の生産に長ける自作農や小作農を優遇する措置を講じて、食糧増産を目指した。

戦争が長引き、さらに継続するための米が不足していた。そのため米生産に長ける小作農に対する不当な解約を地主に禁じながら、米の生産者を財政的に優遇することで、米の増産を図った。